「主よ、嵐の中にわ たしたちを見捨てな いでください」教皇 による黙想

(4,35-41) から、イエスが 突風を静めるエピソードを、 以下のように黙想された。

2020/03/31

VATICAN NEWSからの記事:リンク

無人のサン・ピエトロ広場で、介添 えと聖書朗唱者だけを伴って祈る教 皇の姿(原音):

ちは怖れ、おびえています。福音書のエピソードにある、突然のの第のイエスのというにあられたちはいるというにありいたものであり、というにきました。一人であり、というにないがあるように、一方であり、の慰しにないがあるようにないであり、のをいるのです。このというは皆一緒にいるのです。たちは皆一緒にいるのです。

「わたしたちは溺れそうです」(参照:同4,38)と不安の中で声を合わせるあの弟子たちのように、わたしたちも、一人ひとりがもう勝手にふるまうことはできず、皆が一つになってこそ乗り越えられると気づいています。

この福音のエピソードに自分たちを 重ねることは簡単です。しかし、難 しいのはイエスの態度を理解するこ とです。弟子たちが嵐の中で、当然 のことながら、おびえ絶望している 時、イエスは今にも沈みそうな船のへさきで、騒ぎにも関わらず、御父に信頼して眠っておられました。イエスが眠っておられるのを福音書の中で見るのはこの時だけです。イエスは起き上がって、風と水を静めた後、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」(同4,40)と弟子たちに向かって言われました。

イエスが持つ信頼とは対照的な、弟 子たちの信仰の欠如は何によるもの でしょうか。弟子たちはイエスに対 する信頼を捨てたわけではありませ ん。それゆえ、彼らはイエスに訴え ます。「先生、わたしたちがおぼれ てもかまわないのですか | と訴える のです。「かまわないのですか」と いう言葉に見られるように、弟子た ちはイエスが彼らに対し無関心で、 彼らを放置していると思っていま す。わたしたちの家庭において、一 番つらいことの一つは、「あなたに とって、わたしのことなど、どうで

もいいのだ」という言葉を聞くことです。これは心を傷つけ、動揺さにる言葉です。この言葉はイエスにとっても心を動かすものだったでしょう。なぜならば、イエスほどいたしたちを思ってくださる方はいないらです。実際、イエスはその対象を聞き、落胆した弟子たちを救われました。

嵐は、わたしたちの弱さをあばき出し、わたしたちが計画的、習慣的的で表出になったことを明るみ、にあったことを明込みであるとは眠り込ってとないたちは、力を与えてとをもらったとなった。嵐は、おたしたちがしまい。 これかけたものを発見させます。

嵐によって、わたしたちのエゴを隠し、自分の外面だけをつくろっていた、ステレオタイプの仮面ははずれ

ました。そして、再び、兄弟として の所属、祝福された共通の所属を再 発見しました。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないの か」。主よ、あなたの言葉は、今夜 わたしたちの胸を打ち、わたしたち すべてに向けられています。この世 界、わたしたちが愛する以上にあな たが愛しておられるこの世界を、わ たしたちは強く万能だという自信に 満ちて、全力で駆けていました。利 益を追求し、物事に没頭し、多忙の 中で何も考えられなくなっていまし た。わたしたちはあなたの呼びかけ に止まることも、戦争や世界的な不 正義を前に目を覚ますことも、貧し い人の叫びや深く病んだ地球の声に 耳を傾けることもありませんでし た。病んだ世界の中で自分たちは常 に病まずにいられると、無関心のま ま突き進んでいきました。そして 今、わたしたちは荒れた海にいて、

あなたに哀願しています「主よ、目 をお覚ましください」と。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないの か」。主は、わたしたちに呼びかけ ます。それは信仰への呼びかけで す。それは主をただ信じるだけでな く、主のもとに行き、主により頼め との招きです。この四旬節、主の差 し迫った呼びかけが響きます。「悔 い改めよ」「今こそ、心からわたし に立ち帰れ」(ヨエル2.12)。主は この試練の時を「選びの時」とする よう呼びかけます。それは、主の裁 きの時ではなく、わたしたちの裁き の時です。何が重要で、何が過ぎ去 るものか、必要なものとそうでない ものを区別する時です。人生の指針 を、主と、他の人々に向けて定めな おす時です。

わたしたちはこの旅において、怖れ に対し、自らの命を捧げるという行 為をもって反応した、多くの模範的

な仲間たちを目にしました。その勇 気ある寛大な献身は、人々の中で働 く聖霊の力の注ぎによって形作られ たものです。聖霊のいのちは、わた したちの生活が普通の人々、普段は 目立たない人々によって織りなさ れ、支えられていることを見せてく れます。こうした人たちは、新聞や 雑誌のタイトルを飾ったり、目立つ 舞台に立つことはなくとも、わたし たちの歴史上の重大な出来事を今刻 んでいる人たちです。それは医師 や、看護師、スーパーマーケットの 職員、清掃員、介護職の人々、交通 関係者、公安関係者、ボランティ ア、司祭、修道者、そして、自分の 力だけでは救われないことを知って いる他の多くの人々のことです。

この苦しみを前に、わたしたちは「すべての人を一つにしてください」(ヨハネ17,21)という、イエスの祭司的祈りを見出し、体験します。毎日どれだけ多くの人たちが、

パニックを広めることなく、共同責 任を自覚し、忍耐を示しながら、希 望を皆に伝えっていることでしょ う。どれだけ多くの両親や、祖父 母、教師たちが、子どもたちに日常 の小さな行為を通して、習慣を変 え、眼差しを上げ、祈るよう招きな がら、この危機に対応し、過ごす方 法を教えていることでしょう。どれ だけ多くの人々が、皆のために犠牲 を捧げ、取りなしを祈っていること でしょう。祈りと沈黙の奉仕、それ はわたしたちを勝利に導く武器で す。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」。信仰の一歩は、自分が救いを必要とする者であると知ること知ることにもしたちは自分だけでしたったちは自分だけでしません、一人では沈んでします。星を見つめたいにしえをからしたちはます。イエスをわたしたちいます。のいのちの船の中に招きましょう。

主は、この嵐のさなか、わたしたちに話しかけます。目覚め、連帯と支援を持ち、連帯と支援を明まれた。 神と希望を持ち、連帯と支援をのけれた。 神と希望を持ち、連帯と支援をのけれた。 でが挫折にといるのはいかもはいたものにはいかがあります。 はれたしたがにはいいかれたもにはいいたもにはいいたもにはいいかれました。 があります。十字架にはがいいかれました。 は舵(かじ)があります。十字架にはがいいかあります。 おいてわたしたちは贖われました。 わたしたちには希望があります。十字架においてわたしたちは贖われました。わたしたちには希望があります。十字架においてわたしたちは再び癒され、抱擁されました。何ものも誰もわたしたちを贖い主の愛から引き離すことはできません。

愛情や出会いの欠如に苦しみ、多く の物の不足を経験しつつある、この 隔離された生活の中で、わたしたち は再び救いのメッセージを聞きま す。主は復活され、わたしたちの近 くにおられます。主は十字架上から わたしたちに呼びかけます。未来に 待つ生活を見出し、わたしたちを必 要とする人々に向き直り、わたした ちが持つ恵みを知り、強め、活かす ようにと招きます。「暗くなってい く灯心を消すことなく」(参照:イ ザヤ42.3)、希望の灯を再びともし ましょう。

イエスの十字架を抱きしめることは、今の災難を抱きしめる勇気を得ることです。全能であろうとするが、 変になっの焦りを捨て、聖霊だけが促すことのできる創造性に開くができる創造性に開くがいるとです。 ですの受け入れと兄弟愛と連帯におい形の受け入れと兄弟愛と連帯においると感じられる社会を築りますことを意味します。

イエスの十字架においてわたしたち は救われました。それは希望を受け 入れ、その希望によってわたしたち を守るための可能な限りの手段を強 め支えるためでした。希望を抱きし めるために、主を抱きしめること。 これが、怖れから解放し、希望を与 える信仰の力です。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」。親愛なる兄弟姉妹の皆さん、 聖ペトロの岩のごとき信仰を物語る この場所から、今夜、わたしは、民 の救いであり、嵐の海の星である聖 母の取り次ぎをもって、すべての皆さまを主に託したいと思います。 ローマと世界を抱きしめるこの広場から、慰めの抱擁としての神の祝福が皆さまの上に降りますように。

主よ、世界を祝福し、体に健康を、 心に慰めを与えてください。わたし たちに恐れぬよう命じてください。 しかし、わたしたちの信仰は弱く、 わたしたちは慄いています。それで も、主よ、わたしたちを吹き荒れる 嵐の中に見捨てないでください。 「恐れることはない」と繰り返して ください。そして、わたしたちはペ トロと共に「思い煩いを何もかもあ なたにお任せします。あなたがわた したちのことを心にかけていてくだ さるからです」 (参照:1ペトロ 5.7)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kyoukoniyoru-mokusou/ (2025/12/15)